景春と谷中如意輪観音の歴史秘話

戦乱の世を駆け抜けたひとりの武将と妻の愛

数々の合戦を戦い抜けた景春。その死の知らせを聞いた奥方は、亡き夫の冥福を祈り続けた――。

中野城の三代城主景春

中野藤内左衛門景春は、中野氏二代国継の子として生まれ、元徳二年（一三三〇）五月十四日に国継が死去すると、二九歳で中野元宿にあった中野城の三代城主となります。

鎌倉幕府討伐のため挙兵した、新田義貞※1の側近として各地を転戦。景春が太平記※2に登場するのは、延元三年（一三三八）の越前高木の杜の戦いと義貞戦死の場面です。

忠義の武将の死

延元三年（一三三八）閏七月二日、総大将の新田義貞は、軍勢を藤島城攻略に差し向けました。義貞は自ら陣頭指揮を執るべく、わずか五十騎を従え出陣。畦道を伝わって行くと、敵勢三百余人と偶然出会います。敵は徒歩で、弓を持ち矢を射かけます。義貞方は騎馬で弓の用意がありません。

この時、景春は義貞に「大将たるものは、小さな事にこだわらず、ここを引き返してください」と忠告しましたが、義貞は聞き入れず、「一士を失って、独り免れるのは、わが本意ではない」と、なおも敵の中へ駆け入ろうとしましたが、馬に五本の矢を射立てられ、土手下に倒れてしまいました。

義貞は左足を馬に敷かれ、立ち上がろうとしたところへ、白羽の矢が眉間に当たり、痛みに耐えかね、もはやこれまでと自害して果てました。

近くに迫っていた敵の氏家重国という者が駆け寄って、義貞の首を取って、黒丸城へ走り去りました。畦を隔てて戦っていた景春は、馬から飛んで下り、義貞の首のない死骸の前にひざまずいて自害して果てます。この時、景春三十八才。義貞と同年だったといいます。

谷中如意輪観音

かぶとの守り本尊として景春が崇敬していた持仏（守り本尊として居間に安置したり、身につけたりして常に信仰する仏像）。

※1**新田義貞**…清和源氏、新田氏七代朝氏（ともうじ）の嫡男として生まれ、元弘三年（1333）5月、生品神社（太田市新田）で鎌倉幕府倒幕の兵をあげ、倒幕を果たします。京都に上って建武新政の重要な地位に就き、建武二年（1335）11月、足利尊氏追討の総大将に任じられ、各地を転戦。藤島城付近の灯明寺畷（とうみょうじなわて）にて戦死。南朝（天皇方）一筋の転戦に次ぐ転戦の末の最期でした。

※2**太平記**…「平家物語」と並ぶ日本の代表的な軍記物。40巻。北条高時の失政や建武中興をはじめ、南北朝時代50余年間の争乱の様子が描かれています。

殉死した夫の冥福を祈り続けた妻の愛

景春の奥方は、夫の殉死を聞いて悲しむことに限りがありませんでした。生前景春は守り本尊の持仏として、如意輪観音を拝んでいたので、奥方は、この如意輪観音を拝して、尼となり妙言法尼と号することに…。

興国二年（一三四一）【北朝の年号は暦応四年】三月、妙言法尼は押落（大字中野字蛭沼）の観音畑と名づけた地勢が険しく人跡もまれな山の端に庵を結び、そこに如意輪観音像を安置し、朝夕殉死した夫のことを思い、その冥福を祈り続けたのです。

慶長三年（一五九八）九月、中野氏の家臣の孫、金井左五衛門・神藤外記の二人が、押落の妙言法尼の庵の跡から谷中の現在地に、如意輪観音像を移し、世の人たちが広く礼拝できるように、お堂を建てました。これが谷中観音堂で、宝永五年（一七〇八）四月には、回国修行僧堯親が東上州三十三観音霊場に定め、第九番札所となりました。

谷中如意輪観音【石像】

観音像は秘仏（普段拝観を許していない仏像）のため、誰でも拝めるように石像が建立されました。

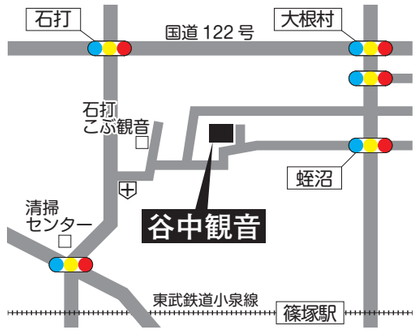
↑妙言法尼の庵があったと推定される押落

観音堂には、今も多くの参拝客が訪れる…

谷中如意輪観音は、夫婦和合・安産・長寿・福富をみちびき、病気や苦難を救うといわれています。町外からも数多くの参拝客が訪れます。

縁日は毎月17日、例祭は1月17日、8月17日に行われ、ご開帳は午年（うまどし）の12年ごと。今年、12年に一度のご開帳を迎えます。大開帳日は、5月17日㈯、18日㈰を予定しています。

【谷中観音堂の位置略図】



今も地元の人たちで作られる「お腰」

地元老人会の皆さんの手により、「お腰」作りが今も行われています。「お腰」は腹巻きのことで、子宝と安産を祈願する谷中如意輪観音のご利益があるとされるお守りです。

「お腰」には赤と白色があり、「赤色お腰」をお腹の上に置いて毎晩寝ると女の赤ちゃんが生まれ、「白色お腰」をお腹の上に置いて毎晩寝ると男の赤ちゃんが生まれるということを一人の老人から聞きました（あくまで言い伝えです）。

↑谷中如意輪観音石像は、観音堂敷地内にその姿を見ることができます

【参考文献】
細谷清吉（2005）『町の歴史人物』邑楽町
細谷清吉（2010）『古代の邑楽町付観音霊場』細谷清吉
細谷清吉（2011）『新田邑楽の古代中世の研究』新田邑楽の古代中世の研究刊行会

↑神光寺の大カヤ（県指定天然記念物）　カヤの木がこの地に植えられたのは、鎌倉時代の文永二年（1265）に中野城が築かれた頃といわれます

↓長い間、その年輪を積み重ねてきた大カヤは、樹高21メートル、幹周り5.6メートル、根回り15メートルにもなります